『太平広記』訳注

――巻四百十九「龍」二（上）――

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』訳注 ―巻四百十八「龍」一（下）―」（『国語国文学研究』第四十四号 二〇〇九年）に続き、『太平広記』の巻四百十九の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』訳注 ―巻四百十八「龍」一（上）―」（『国語国文学研究』第四十三号 二〇〇八年）に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

なお本話は長編のため、内容によって全体を十一段落に分けた上で、本稿では前半六段落、次稿では後半五段落を扱うこととする。

○15「柳毅」

（一）

〔本文〕

唐儀鳳中、有儒生柳毅者應舉下第、將還湘濱。念鄉人有客於涇陽者、遂往告別。

至六七里、鳥起馬驚、疾逸道左。又六七里、乃止。見有婦人、牧羊於道畔。毅怪視之、乃殊色也。然而蛾臉不舒、巾袖無光。凝聽翔立、若有所伺。毅詰之曰、「子何苦而自辱如是。」婦始楚而謝、終泣而對曰、「賤妾不幸、今日見辱於長者。然而恨貫肌骨、亦何能愧避。幸一聞焉。妾洞庭龍君小女也。父母配嫁涇川次子。而夫壻樂逸、爲婢僕所惑、日以厭薄。既而將訴於舅姑、舅姑愛其子、不能禦。迨訴頻切、又得罪舅姑、舅姑毀黜以至此。」言訖、

歔欷流涕、悲不自勝。

又曰、「洞庭於茲、相遠不知其幾多也。長天茫茫、信耗莫通。心目斷盡、無所知哀。聞君將還呉、密通洞庭。或以尺書寄托侍者。未卜將以爲可乎。」

〔訓読〕

唐の儀鳳中、儒生柳毅なる者有り　挙に応じて下第し、将に湘浜に還らんとす。郷人に涇陽に客たる者有るを念ひ、遂に往きて別れを告ぐ。

六七里に至り、鳥　起ち　馬　驚き、道左に疾逸す。又た六七里にして、乃ち止む。婦人有り、羊を道畔に牧するを見る。毅　怪しみて之を視れば、乃ち殊色なり。然るに蛾臉　舒びず、巾袖に光無し。凝聴翔立して、伺ふ所有るが若し。毅　之に詰ひて曰く、「子　何ぞ苦しみて自ら辱むること是の如きや」と。婦　始め楚として謝するも、終に泣きて対へて曰く、「賤妾不幸にして、今日長者に辱めらる。然而れども恨み肌骨を貫き、亦た何ぞ能く愧ぢ避けん。幸はくは一たび聞け。妾は洞庭竜君の小女なり。父母　涇川の次子に配嫁す。而るに夫婿　楽逸し、婢僕の惑はす所と為り、日び以て厭薄す。既にして将に舅姑に訴へんとするも、舅姑　其の子を愛して、禦ぐ能はず。訴ふること頻切なるに迨び、又た罪を舅姑に得、舅姑　毀り黜けて以て此に至る」と。言ひ訖はりて、歔欷流涕し、悲しみて自ら勝へず。

又た曰く、「洞庭の茲に於ける、相遠きこと其の幾多なるかを知らざるなり。長天　茫茫として、信耗　通ずる莫し。心目断尽し、哀を知らしむる所無し。聞くならく　君　将に呉に還り、密く洞庭を通ると。或いは尺書を以て侍者に寄托せん。未だ将た以て可と為すべきかを卜せず」と。

〔語注〕

○湘濱　湘水のほとり。湘水は広西チワン族自治区に発し、北東に流れ、瀟水を合わせて洞庭湖に注ぐ川。かつて舜の二人の后娥皇と女英は舜の崩御に際して、後を追って湘水に身を投げたという。○涇陽　現在の陝西省涇陽市。かつての長安のすぐ北、涇水の北岸に在った。○蛾臉　「蛾」は蛾眉のことで、美人の眉の喩え。ここではそのような美しい眉を備えた顔立ちのこと。○凝聴翔立　「凝聴」はじっと聞き入ること、「翔立」はうろついたり立ち止まったりすること。○楚　いたむ、かなしむ。○長者　徳の高い人。相手に対する尊称。○洞庭龍君　「洞庭」は湖南省北部にある中国最大の淡水湖。湘水、沅水などが流れ込んで揚子江に注ぐ。洞庭湖の竜王の話は、「震沢洞」（巻四百十八「龍」部・出『梁四公記』）にも見られる。○涇川　涇水のこと。陝西省を流れる川の名。甘粛省固原県の南の牛営と化平県の西南の大関山に源を発し、合流して渭水に注ぐ。○歔欷　すすり泣く。○信耗　手紙。音信。

〔訳文〕

唐の儀鳳年間（六七六～六七九）、柳毅という学生が科挙を受験して落第し、故郷の湘浜に帰ろうとしていた。その時、同

郷の人が涇陽に仮住まいしているのを思い出し、そこで別れを告げに行くことにした。

六、七里（一里＝五五九・八m）行くと、鳥が飛び立って馬がはっとし、道の左側に素早く逃げ出した。更に六、七里進んでやっと止まった。そこで女性が道端で羊を放牧しているのを見かけた。柳毅は怪しく思ってよく見てみると、何と素晴らしい容貌であった。しかし蛾眉のかんばせは晴れやかではなく、衣装にも輝きがない。じっと耳をすましたり立ち止まったりして、何かを待ちまかえているかのようである。柳毅は女性に「あなたはどうして苦しみながらこんなに自分を辱めているのですか。」と尋ねた。女性は初めは悲しそうに謝っていたが、とうとう泣きながら答えた。「私めは不幸にも、今日あなた様に恥をさらすこととなってしまいました。しかし恨み骨髄に徹しておりますれば、どうして恥じて身を隠すことなどできましょうや。どうか少々お聞き下さいませ。私は洞庭竜君の末娘でございます。両親は私を涇川竜王の次男に嫁がせました。しかし夫は遊び耽り、下男下女に惑わされてしまい、日に日に私を疎んずるようになりました。義父母に申し上げようといたしましたが、義父母は息子を溺愛しており、止めることはできません。何度も何度も申し上げている内に義父母にも嫌われてしまい、誹り退けられてこのありさまです。」話し終わるとすすり泣き、悲しみに堪えきれない様子であった。

また「洞庭湖はここからどれほど遠いのか計り知れません。大空は果てしなく広がり、音信を通ずることもかないません。思いもまなざしも届かず、私の悲しみを知らせることもできません。あなた様は呉にお戻りになり、洞庭湖のすぐ近くをお通りと伺いました。お付きの方にでも手紙をおまかせできたらと思うのですが、どうかお引き受けいただけませぬでしょうか。」と頼んだ。

（二）

〔本文〕

毅曰、「吾義夫也。聞子之説、氣血俱動。恨無毛羽、不能奮飛。是何可否之謂乎。然而洞庭深水也。吾行塵閒、寧可致意耶。唯恐道途顯晦、不相通達、致負誠托、又乖懇願。子有何術、可導我邪。」

女悲泣且謝曰、「負載珍重、不復言矣。脱獲回耗、雖死必謝。君不許、何敢言。既許而問、則洞庭之與京邑、不足爲異也。」毅請聞之。女曰、「洞庭之陰、有大橘樹焉。鄉人謂之社橘。君當解去茲帶、束以他物。然後叩樹三發、當有應者。因而隨之、無有碍矣。幸君子書敍之外、悉以心誠之話倚託。千萬無渝。」毅曰、「敬聞命矣。」女遂於襦閒解書、再拜以進。東望愁泣、若不自勝。毅深爲之戚、乃置書囊中。

因復問曰、「吾不知子之牧羊、何所用哉。神祇豈宰殺乎。」女曰、「非羊也。雨工也。」「何爲雨工。」曰、「雷霆之類也。」數顧視之、則皆矯顧怒歩、飲齕甚異。而大小毛角、則無別羊焉。

毅又曰、「吾爲使者、他日歸洞庭、幸勿相避。」女曰、「寧止不避、當如親戚耳。」語竟、引別東去。不數十歩、回望女與羊、俱亡所見矣。

〔訓読〕

毅曰く、「吾は義夫なり。子の説を聞き、気血　俱に動く。恨むらくは毛羽無く、奮飛する能はざるを。是　何ぞ可否を之謂はんや。然而れども洞庭は深水なり。吾　塵間を行くに、寧ぞ意を致すべけんや。唯だ恐らくは道途　顯晦にして、相通達せず、誠托に負くを致し、又た懇願に乖かんことを。子に何の術有りて、我を導くべきや」と。

女　悲泣し且つ謝して曰く、「負載珍重、復た言はず。脱し回耗を獲ば、死すと雖も必ず謝せん。君　許さずんば、何ぞ敢へて言はん。既に許して問はば、則ち洞庭の京邑に与ける、異と為すに足らざるなり」と。毅　之を聞かんことを請ふ。女曰く、「洞庭の陰に、大橘樹有り。郷人　之を社橘と謂ふ。君　当に茲の帯を解き去りて、束ぬるに他物を以てすべし。然る後に樹を叩くこと三発ならば、当に応ずる者有るべし。因りて之に随はば、碍ぐる有る無し。幸はくは君子　書叙の外、悉く心誠の話を以て倚託せん。千万渝はること無かれ」と。毅曰く、「敬して命を聞けり」と。女　遂に襦間より書を解き、再拝して以て進む。東望して愁ひ泣き、自ら勝へざるが若し。毅　深く之が為に戚み、乃ち書を囊中に置く。

因りて復た問ひて曰く、「吾　知らず　子の羊を牧するは、何の用ふる所なりや。神祇　豈に宰殺するか」と。女曰く、「羊に非ざるなり。雨工なり」と。「何をか雨工と為す」と。曰く、「雷霆の類なり」と。数しば顧みて之を視れば、則ち皆矯顧怒歩し、飲齕　甚だ異なり。而るに大小毛角、則ち羊に別なる無し。

毅　又た曰く、「吾　使者と為り、他日　洞庭に帰らば、幸はくは相避くること勿かれ」と。女曰く、「寧ぞ止だに避けざるのみならんや、当に親戚の如くすべきのみ」と。語　竟はりて、引き別れて東に去く。数十歩ならずして、女と羊とを回望すれば、俱に見る所亡し。

〔語注〕

○塵間　俗世。人間の世界。○道途顯晦　道がはっきり見えること。「顯晦既殊」（巻二百九十七「丹丘子」出『陸用神告録』）、「顯晦殊途」（巻三百四十「李章武」出『李景亮為作伝』）、「顯晦殊途」（巻四百九十二「霊応伝」）と同様の言い方か。○負載珍重　「負載」は背負うこと。ここでは依頼を引き受けたこと。○回耗　返信。○洞庭之陰　「陰」は山の北側、川の南側を指す。ここでは洞庭湖の南岸を言う。『説文解字』十四篇下「淘」部に「陰、闇也。水之南、山之北也。」（陰は、闇なり。水の南、山の北なり。）とある。○宰殺　屠殺すること。○雨工　「雨土」に同じか。雨土は羊の姿をした雨の神の類。『新唐書』巻三十四「五行志・羊禍」に「乾符二年、洛陽建春門外因暴雨、有物

墮地如殺羊。不食、頃之入地中、其跡月餘不滅。或以爲雨土也。占曰、當旱。」（乾符二年、洛陽建春門外に暴雨に因りて、物の地に墮つる有りて殺羊の如し。食らはず、之を頃くして地中に入り、其の跡　月余　滅せず。或るひと以為へらく雨土なりと。占に曰く、「当に旱すべし」と。）とある。○矯顧怒歩　力強く辺りを見回したり歩いたりすること。○飲齕　飲み食いすること。

〔訳文〕

柳毅は「私は義侠心有る者です。あなたのお話をうかがって、気も血も滾る思いです。翼が無くて飛んでいけないのが残念なくらいです。どうして否応ありましょうか。しかし洞庭湖は深い湖です。私は俗世を往来する身でありますのに、どうしてあなたのお気持ちを伝えられるでしょうか。人界と神界は道を異にしているためお届けすることができずに、あなたの心からの御依頼を果たせず、懇ろな願いに背いてしまうことが心配です。あなたは如何なる方法によって、私をお導きくださるのでしょうか。」と言った。

娘は悲しげに泣きながらも礼を言った。「有り難くもお引き受けいただき、言葉もございません。もし返事を手にできましたら、たとえ死んでもきっと御礼を致します。あなたがお引き受け下さらなければ申し上げないことなのですが、お引き受けの上お尋ねとありますれば申し上げましょう、洞庭湖と都とは、いかほどの違いもないものなのです。」柳毅がもっと聞きたいと頼むと、娘は「洞庭湖の南側に大きな橘の樹があります。村人は社橘と呼んでいます。あなたはその帯をほどいて、他の帯をおしめになって下さい。それから樹を三回叩けば、返事をする者がいるはずです。そしてそれについていけば、何の障害もございません。どうかあなた様には手紙に書いたことの外にも、私の心からの話をお伝え願います。くれぐれも心変わりなどいたされませぬよう。」と言った。柳毅は「慎んで承知致しました。」と答えた。娘はそこで肌着の間から手紙を取り出し、再拝して手渡した。そして東を望んで愁い泣き、堪えきれないようであった。柳毅は心から彼女に同情し、それから手紙を袋の中に入れた。

そして柳毅は更に「私にはよく分からないのですが、あなたが羊を飼っているのは、何に使うためなのでしょうか。天地の神も屠殺したりするのでしょうか。」と尋ねた。娘は「これは羊ではありません。雨工です。」と答えた。柳毅「雨工とはどのようなものなのでしょうか。」娘「雷の仲間です。」何度も振り返って見てみると、雨工達はみな力強く辺りを見回したり歩いたりしており、飲み食いするさまは羊とは全く違っていた。しかし大きさや角、毛は羊と違いは無かった。

柳毅がまた「私が使者の任を果たし、後日あなたが洞庭湖にお戻りになられたら、どうか私を避けたりなさらないで下さい。」と言うと、娘は「どうしてあなたを避けないばかりでありましょう、当然親戚のようにおつきあいさせていただきま

す。」と言った。話が終わると、柳毅は別れて東へと向かった。数十歩もいかない内に娘と羊を振り返って見れば、どちらも見えなくなっていた。

（三）

〔本文〕

其夕、至邑而別其友。月餘（月餘原作曰余。據明鈔本、陳校本改。）到鄉還家、乃訪於洞庭。洞庭之陰、果有橘社。遂易帶向樹、三擊而止。俄有武夫出於波間、再拜請曰、「貴客將自何所至也。」毅不告其實、曰、「走謁大王耳。」

武夫揭水指路、引毅以進。謂毅曰、「當閉目。數息可達矣。」毅如其言、遂至其宮。始見臺閣相向、門戸千萬、奇草珍木、無所不有。

夫乃止毅停於大室之隅、曰、「客當居此以伺焉。」毅曰、「此何所也。」夫曰、「此靈虛殿也。」諦視之、則人間珍寶、畢盡於此。柱以白璧、砌以青玉、牀以珊瑚、簾以水精。雕琉璃於翠楣、飾琥珀於虹棟。奇秀深杳、不可殫言。

然而王久不至。毅謂夫曰、「洞庭君安在哉。」曰、「吾君方幸玄珠閣、與太陽道士講大經。少選當畢。」毅曰、「何謂大經。」夫曰、「吾君龍也。龍以水爲神、擧一滴可包陵谷。道士乃人也。人以火爲神聖、發一燈可燎阿房。然而靈用不同、玄化各異。太陽道士精於人理。吾君邀以聽。」

言語畢、而宮門闢。景從雲合。而見一人披紫衣、執青玉。夫躍曰、「此吾君也。」乃至前以告之。

〔訓読〕

其の夕べ、邑に至りて其の友に別る。月余にして郷に到りて家に還り、乃ち洞庭を訪ぬ。洞庭の陰に、果たして橘社有り。遂に帶を易へて樹に向かひ、三擊にして止む。俄かに武夫の波間より出づる有り、再拜して請ひて曰く、「貴客　将た何れの所より至るか」と。毅　其の実を告げずして、曰く、「走　大王に謁せんのみ」と。

武夫　水を掲げ路を指し、毅を引きて以て進む。毅に謂ひて曰く、「当に目を閉づべし。数息にして達すべし」と。毅　其の言の如くし、遂に其の宮に至る。始め見るに台閣　相向かひ、門戸　千万、奇草　珍木、有らざる所無し。

夫　乃ち毅を止めて大室の隅に停めて、曰く、「客　当に此に居りて以て伺ふべし」と。毅曰く、「此　何れの所か」と。夫曰く、「此　靈虛殿なり」と。諦らかに之を視れば、則ち人間の珍宝、畢く此に尽きたり。柱は白璧を以てし、砌は青玉を以てし、牀は珊瑚を以てし、簾は水精を以てす。琉璃を翠楣に雕し、琥珀を虹棟に飾る。奇秀深杳なること、殫くは言ふべからず。

然而れども王　久しく至らず。毅　夫に謂ひて曰く、「洞庭君　安くに在りや」と。曰く、「吾が君　方に玄珠閣に幸し、太陽道士と大経を講ず。少選にして当に畢はるべし」と。毅曰く、「何をか大経と謂ふ」と。夫曰く、「吾が君は竜なり。竜は

水を以て神と為し、一滴を挙げて陵谷を包むべし。道士は乃ち人なり。人は火を以て神聖と為し、一灯を発して阿房を燎くべし。然而れども霊用　同じからず、玄化　各おの異なり。太陽道士　人理に精し。吾が君　邀へて以て聴く」と。

言語　畢はり、而して宮門　闢く。景のごとく従ひ雲のごとく合す。而して一人の紫衣を披、青玉を執るを見る。夫　躍りて曰く、「此　吾が君なり」と。乃ち前に至りて以て之に告ぐ。

〔語注〕

○武夫　勇士。猛々しい男。○走　自己の謙称。司馬遷「報任少卿書」（『文選』巻四十一）に「太史公牛馬走、司馬遷再拜言。」（太史公の牛馬走、司馬遷再拝して言ふ。）とあり、李善注に「太史公、遷父談也。走、猶僕也。言己爲太史公掌牛馬之僕。自謙之辭也。」（太史公は、遷の父談なり。走は、猶ほ僕のごときなり。己　太史公の為に牛馬の僕を掌るを言ふ。自謙の辞なり。）とある。○霊虚殿・玄珠閣　他書未見。洞庭君の宮殿の名と思われるが、未詳。○太陽道士　他書未見。火の理に精通した人間ということを表しているか。○少選　しばらく。○龍以水爲神　竜と水に関係の深いことは、例えば『論衡』「龍虚」篇に「且龍之所居、常在水澤之中、不在木中屋間。」（且つ竜の居る所は、常に水沢の中に在り、木中屋間に在らず。）とある。○人以火爲神聖　人類が火を用いるようになったのは、燧人氏が教えたからであるという。『韓非子』「五蠹」篇に「民食果蓏蚌蛤、腥臊惡臭而傷害腹胃、民多疾病。有聖人作、鑽燧取火、以化腥臊。而民説之、使王天下、號之曰燧人氏。」（民果蓏蚌蛤を食らひ、腥臊悪臭にして腹胃を傷害し、民に疾病多し。聖人の作る有り、燧を鑽りて火を取り、以て腥臊を化す。而して民　之を説び、天下に王たらしめ、之を号して燧人氏と曰ふ。）とある。○阿房　秦の始皇帝が築いた宮殿の名。今の陝西省西安市の北西、渭水の南にあった。『史記』に拠ればその大きさは東西五百歩（約六七五m）、南北五十丈（約一一二・五m）、上には一万人を座らせることができ、下には五丈（約一一・二五m）の旗を建てることができるという巨大なものであったが、項羽が咸陽に入った際に焼き払い、その火は三ヶ月消えなかったと言われる。○人理　或いは「火理」の誤か。

〔訳文〕

その日の夕べ、村にたどり着いて友人に別れを告げた。一月余り経って故郷にたどり着き帰宅すると、やっと洞庭湖を尋ねることができた。洞庭湖の南岸には、確かに橘の生えた社があった。そこで帯を取り替えて樹を三回叩いて止めた。すると突然、武人が波間から現れて再拝し、「客人は一体どちらよりおいでか。」と尋ねた。柳毅は本当のことは言わず、「私は大王にお目にかかりたいのですが。」と言った。

武人は水を押し開いて路を指さし、柳毅を引き連れて進んでいった。柳毅に向かって「目を閉じられよ。すぐに到着いたす。」と言った。柳毅が言われたとおりにしていると、そのうちに宮殿に到着した。かくてやっと目にしたのは、高殿が向かい合っ

てそびえ、千万もの扉がずらりと連なり、珍しい植物が何でも生えているという光景であった。

武人はやっと柳毅を大きな部屋の片隅に留め、「客人はここでお待ちになられよ。」と言った。柳毅が「ここはどこでしょうか。」と尋ねると、武人は「ここは霊虚殿である。」と答えた。よく見てみると、人界の珍しい財宝はみな揃っていた。柱は白璧、階段は青玉、寝台は珊瑚、簾は水晶で作られていた。琉璃を翡翠の廂に象嵌し、琥珀を虹の形の棟木に飾り付けていた。素晴らしくも奥深いこと、言い尽くせないほどであった。

しかし王は何時になっても姿を見せない。柳毅は武人に「洞庭君はどちらにおいでなのですか。」と尋ねた。武人は「我が君はちょうど玄珠閣にお出ましになり、太陽道士と大経について語り合っておられる。まもなく終わるはずである。」と答えた。柳毅が「大経とは如何なるものでしょうか。」と尋ねると、武人は「我が君は竜であらせられる。竜は水を神聖なるものとするが、水とは一滴で丘や谷を包みこむことができるものである。しかし道士は人である。人は火を神聖なるものとするが、火とは一本の灯火で阿房宮を焼き尽くすことができるものである。（どちらもすごい力を持っているが、）しかしその霊妙なる働きは同様ではなく、玄妙なる変化はそれぞれ異なっておる。太陽道士は人界の道理に精通しておられる。それ故我が君は彼を招いて語り合っておられるのだ。」と答えた。

言い終わると宮門が開いた。影が付き従うように、雲がわきおこるように（従者の一群が現れ）、紫衣を着て青玉を手にした人が現れた。武人は躍り上がって、「こちらが我が君であらせられる。」と言い、前に進み出て申し上げた。

（四）

〔本文〕

君望毅而問曰、「豈非人間之人乎。」毅對曰、「然。」毅而設拜。（明鈔本毅而設拜作既而對後拜。）君亦拜、命坐於靈虚之下。

謂毅曰、「水府幽深、寡人暗昧。夫子不遠千里、將有爲乎。」毅曰、「毅、大王之鄉人也。長於楚、遊學於秦。昨下第、閒驅涇水右涘、見大王愛女、牧羊於野。風環雨鬢、所不忍視。毅因詰之、謂毅曰、『爲夫壻所薄、舅姑不念、以至於此。』悲泗淋漓、誠怛人心。遂託書於毅、毅許之。今以至此。」因取書進之。

洞庭君覽畢、以袖掩面而泣曰、「老父之罪。不能鑑（能鑑原作診堅。據明鈔本、陳校本改。）聽、坐貽聵瞽、使閨窓孺弱、遠罹搆害。公乃陌上人也。而能急之。幸被齒髮、何敢負德。」詞畢、又哀咤良久、左右皆流涕。

時有宦人密視君者。君以書授之、令達宮中。須臾、宮中皆慟哭。君驚謂左右曰、「疾告宮中、無使有聲。恐錢塘所知。」毅曰、「錢塘何人也。」曰、「寡人之愛弟。昔爲錢塘長、今則致政矣。」毅曰、「何故不使知。」曰、「以其勇過人耳。昔堯遭洪水九年者、乃此子一怒也。近與天將失意、塞其五山。上帝以寡人有薄德於古今、遂寛其同氣之罪。然猶縻繫於此。故錢塘之人、日日候

焉。」

語未畢、而大聲忽發、天拆地裂、宮殿擺簸、雲煙沸湧。俄有赤龍長千餘尺。電目血舌、朱鱗火鬣。項掣金鎖、鎖牽玉柱。千雷萬霆、激繞其身、霰雪雨雹、一時皆下。乃臂青天而飛去。毅恐蹶仆地。君親起持之曰、「無懼、固無害。」毅良久稍安、乃獲自定。因告辭曰、「願得生歸、以避復來。」君曰、「必不如此。其去則然、其來則不然。幸爲少盡繾綣。」因命酌互擧、以款人事。

〔訓読〕

君　毅を望みて問ひて曰く、「豈に人間の人に非ずや」と。毅　対へて曰く、「然り」と。毅　而ち拝を設く。君も亦た拝し、命じて霊虚の下に坐せしむ。

毅に謂ひて曰く、「水府　幽深にして、寡人　暗昧なり。夫子　千里を遠しとせざるは、将た為すこと有りや」と。毅曰く、「毅は、大王の郷人なり。楚に長じ、秦に遊学す。昨に下第し、涇水の右涘に間駆するに、大王の愛女の、羊を野に牧するを見る。風環雨鬢、視るに忍びざる所。毅　因りて之に詰ふに、毅に謂ひて曰く、『夫婿の薄んずる所と為り、舅姑　念はず、以て此に至る』と。悲泗淋漓として、誠に人心を怛ましむ。遂に書を毅に託し、毅　之を許す。今　以て此に至る」と。因りて書を取りて之に進む。

洞庭君　覧ること畢はり、袖を以て面を掩ひて泣きて曰く、「老父の罪なり。鑑聴する能はず、坐ら聾瞽に貽り、閨窓の孺弱をして、遠く搆害に罹らしむ。公は乃ち陌上の人なり。而るに能く之を急にす。幸ひにして歯髪を被らば、何ぞ敢へて徳に負かん」と。詞　畢はり、又た哀咤すること良や久しくして、左右　皆流涕す。

時に宦人の密かに君を視る者有り。君　書を以て之に授け、宮中に達せしむ。須臾にして、宮中　皆慟哭す。君　驚きて左右に謂ひて曰く、「疾く宮中に告げて、声有らしむること無かれ。銭塘の知る所とならんことを恐る」と。毅曰く、「銭塘は何人なりや」と。曰く、「寡人の愛弟なり。昔銭塘の長為るも、今則ち政を致せり」と。毅曰く、「何の故に知らしめざるか」と。曰く、「其の勇　人に過ぐるを以てなるのみ。昔　堯　洪水に遭ふこと九年なるは、乃ち此の子　一たび怒ればなり。近ごろ天将と意を失ひ、其の五山を塞ぐ。上帝　寡人の薄徳を古今に有するを以て、遂に其の同気の罪を寛す。然れども猶ほ此に縶繋す。故に銭塘の人、日日　候す」と。

語　未だ畢はらず、而るに大声　忽ち発し、天　拆け　地裂け、宮殿　擺簸し、雲煙　沸湧す。俄かに赤竜の長千余尺なる有り。電目血舌、朱鱗火鬣あり。項には金鎖を掣き、鎖には玉柱を牽く。千雷万霆、其の身に激繞し、霰雪雨雹、一時に皆下る。乃ち青天を臂きて飛び去る。毅　恐れて地に蹶仆す。君親ら之を起持して曰く、「懼るる無かれ、固より害無し」と。毅　良や久しくして稍く安んじ、乃ち自ら定まるを獲たり。因りて辞を告げて曰く、「願はくは生きながら帰るを得、以て復た来たるを避けん」と。君曰く、「必ず此の如くせざれ。其の

去(ゆ)くは則ち然るも、其の来るは則ち然らず。幸(わが)はくは為に少しく繾綣(けんけん)を尽くさしめよ」と。因りて酌を命じて互ひに挙げ、以て人事を款す。

〔語注〕

○寡人　諸侯が自分を謙遜して言う言葉。寡徳の人の意。○夫子　男子の尊称。特に、先生や目上の人を呼ぶ言葉。○楚　春秋戦国時代の国名。長江中流地帯を領有し、郢に都した。ここではその楚が領有した地域のことを指し、柳毅の故郷である湘水のほとりはこの区域に含まれる。○秦　春秋戦国時代の国名。陝西省の地を領有し、始皇帝の時に天下を統一した。都は咸陽。柳毅が学んだ長安は咸陽の東にある。○涇水　第一段落「涇川」注を参照。○風環雨鬢　「環」はここでは「鬟」の意で、束ねた髪のこと。風雨に曝されてぼさぼさに傷んでしまった髪のことを言う。○坐貽　「坐」はたやすく、何もせずに。「貽」は人にものを贈る。○聾瞽　「聾」は耳が聞こえないこと、「瞽」は目が見えないこと。ここでは涇川の竜王の次子を罵って、そのような無知文盲の輩と言う。○搆害　言いがかりを作って害する。○陌上　「陌」は道。柳毅が本来無関係の通りすがりであることを言う。○被齒髮　「齒髮」は年齢のこと。ここでは歳を重ねて生きながらえる限りの意か。○錢塘　錢塘江のこと。浙江省を流れる川の名。浙江の下流。年に一度中秋節の頃、大海嘯を起こすことで知られる。○堯遭洪水九年　堯は中国古代の聖天子の名。五帝の一人。『史記』巻一「五帝本紀・堯」に堯の時に洪水が発生したため、鯀に命じて洪水を治めさせようとしたという記事がある。「堯又曰、嗟、四嶽、湯湯洪水滔天、浩浩懷山襄陵、下民其憂。有能使治者。皆曰、鯀可。堯曰、鯀負命毀族、不可。嶽曰、异哉、試不可用而已。堯於是聽嶽用鯀。九歳、功用不成。」（堯　又た曰く、「嗟(ああ)、四嶽、湯湯として洪水　天に滔(はびこ)り、浩浩として山を懐(つつ)み陵に襄(のぼ)り、下民　其れ憂ふ。能(よ)く治めしむる者有りや」と。皆曰く、「鯀は命に負きて族を毀(こぼ)てば、可ならず」と。嶽曰く、「异(あ)げんかな、試みて用ふべからざれば已めよ」と。堯　是に於いて嶽に聴(ゆる)して鯀を用ふ。九歳なるも、功用　成らず。）○五山　五岳に同じ。中国を代表する五つの名山。泰山（東岳）・華山（西岳）・衡山（南岳）・恒山（北岳）・嵩山（中岳）。○同氣　兄弟。同朋。○擺簸　「擺」はふるう。「簸」はあおる。○臂　「擘」に通じ、押し開くこと。○蹶仆　「蹶」はつまづく、たおれる。「仆」はたおれふす。○繾綣　情が厚くて離散しない。心に誓って背かない。○款人事　「款」はうちとける、歓ぶ。人界のことを歓談することか。

〔訳文〕

洞庭君は柳毅を眺めて、「人界の者ではないか。」と尋ねた。柳毅は「左様でございます。」と答え、拝礼した。洞庭君も返礼し、霊虚殿に座らせた。

洞庭君は柳毅に向かって、「水中の都は奥深くひっそりとしており、わしは愚かな物知らずだ。であるのにそなたが千里の

道も厭わずにおいでになられたのは、一体どんな御用がおありなのだろうか。」と尋ねた。柳毅は「私毅は大王の国に住まう者でございます。楚で育ち、秦に出かけて学んでおりました。先頃科挙に落第し、涇水の右岸をのんびりと馬を走らせていた所、大王の姫君が野原で羊を飼っておられるのを見かけました。風に乱された髷や雨にさらされた鬢は見るに堪えない様子でした。私がそこで事情をお尋ねしたところ、『夫には疎んじられ、舅や姑には大事にされず、こんな有様となってしまいました』と仰られました。さめざめと流される涙に、私の心は本当に痛みました。そして姫君は私に手紙を言付けられたので、私は引き受けてこちらへお持ちしたのです。」と言い、そして手紙を取り出して差し出した。

洞庭君は手紙を読み終わると、袖で顔を覆って泣き、「この老いぼれた父の罪だ。相手のことを良く知ることもできぬままに、みすみす無知文盲の者に嫁がせてしまい、大事なか弱き娘を遠き地でむごい目に遭わせてしまった。そなたは通りすがりの者でありながら、よくぞ急ぎお知らせ下さった。幸運にも齢を重ねることができるならばその限り、決して御恩に背くことはいたさぬ。」と言った。言い終わるとまたしばらく悲しみ嘆き、左右の者達も皆涙を流した。

その時こっそりと洞庭君に目配せをする役人がいた。洞庭君はその役人に手紙を渡し、宮殿中の者に知らさせた。しばらくすると、宮殿中の者が皆泣き叫び始めた。洞庭君は驚いて左右の者に「急ぎ宮中の者に告げて、声をあげるのを止めさせよ。銭塘に知られたら大変だ。」と言った。毅が、「銭塘とは如何なる御方でしょうか。」と尋ねると、洞庭君は「私の可愛い弟だ。その昔は銭塘江の主であったが、今は政から身を引いておる。」と答えた。毅「どうして彼に知らせないのですか。」洞庭君「ああやつの勇猛さが人並み外れておるからだ。昔　堯が九年間も洪水に見舞われたのは、あやつがちょっと腹を立てたからなのだ。最近では天の将軍と仲違いして、五山を覆い尽くしてしまった。上帝は私の昔からのいささかの功績に免じて、弟の罪をお許し下さった。しかしそれでもまだここに繋がれておる。それ故銭塘の者どもは毎日伺候しに来るのだ。」

話が終わらない内に突然大きな音がして、天地も裂けんばかり、宮殿はぐらぐらと揺れ動き、雲が沸き上がった。そしてにわかに身の丈千尺余り（千尺＝三一一ｍ）の赤竜が姿を現した。稲妻のように光る目に血を吐いたような舌、真っ赤な鱗に火のようなたてがみ。首は金の鎖を引きずり、その鎖は玉の柱を引いている。千の稲妻　万の雷が全身を取り巻き、霰や雪、雨、雹が同時に降り注ぐ。そうして青空を押し開いて飛び去っていった。柳毅は恐ろしくて地面に倒れ込んでしまった。洞庭君は自ら助け起こして、「恐れることはない。もちろん危害は加えぬ。」と言った。柳毅はしばらくして段々落ち着いて来て、やっと動揺を鎮めることができた。そして「どうか生きて帰らせて下さい、銭塘君が戻ってくる前に。」と別れを告げた。洞

庭君は「どうかそんなことは言わないで下され。奴は行く時はあの通りだが、帰ってくる時はああではない。どうか私のわずかばかりの思いを尽くさせて下され。」と言った。そして酒を命じて互いに酌み交わし、人界のことを歓談した。

（五）

〔本文〕

俄而祥風慶雲、融融怡怡。幢節玲瓏、簫韶以隨。紅妝千萬、笑語熙熙。後有一人、自然蛾眉、明璫滿身、綃縠參差。迫而視之、乃前寄辭者。然若喜若悲、零淚如系。

須臾紅煙蔽其左、紫氣舒其右。香氣環旋、入於宮中。君笑謂毅曰、「涇水之囚人至矣。」君乃辭歸宮中。須臾、又聞怨苦。久而不已。

有頃、君復出、與毅飲食。又有一人披紫裳、執青玉。貌聳神溢、立於君左右。謂毅曰、「此錢塘也。」毅起、趨拜之。錢塘亦盡禮相接、謂毅曰、「女姪不幸、爲頑童所辱。賴明君子信義昭彰、致達遠冤。不然者、是爲涇陵之土矣。饗德懷恩、詞不悉心。」毅撝退辭謝、俯仰唯唯。

然後回告兄曰、「向者辰發靈虛、巳至涇陽、午戰於彼、未還於此。中間馳至九天、以告上帝。帝知其冤而宥其失、前所遣責、因而獲免。然而剛腸激發、不遑辭候。驚擾宮中、復忤賓客。愧惕慙懼、不知所失。」因退而再拜。君曰、「所殺幾何。」曰、「六十萬。」「傷稼乎。」曰、「八百里。」「無情郎安在。」曰、「食之矣。」君撫然曰、「頑童之爲是心也、誠不可忍。然汝亦太草草。賴上帝顯聖、諒其至冤。不然者、吾何辭焉。從此已去、勿復如是。」錢塘復再拜。是夕、遂宿毅於凝光殿。

〔訓読〕

俄かにして祥風慶雲あり、融融怡怡たり。幢節　玲瓏として、簫韶　以て随ふ。紅妝千万、笑語熙熙たり。後に一人有り、自然の蛾眉にして、明璫　身に満ち、綃縠　参差たり。迫りて之を視れば、乃ち前に辞を寄せし者なり。然れども喜ぶが若く悲しむが若く、涙を零すこと系の如し。

須臾にして紅煙　其の左を蔽ひ、紫気　其の右に舒ぶ。香気環旋し、宮中に入る。君　笑ひて毅に謂ひて曰く、「涇水の囚人　至れり」と。君　乃ち辞して宮中に帰る。須臾にして、又た怨苦を聞く。久しきも已まず。

頃く有りて、君　復た出で、毅と飲食す。又た一人有り　紫裳を披、青玉を執る。貌　聳え　神　溢れ、君の左右に立つ。毅に謂ひて曰く、「此　錢塘なり」と。毅　起ち、趨りて之に拝す。錢塘も亦た礼を尽くして相接し、毅に謂ひて曰く、「女姪　不幸にして、頑童の辱むる所と為る。明君子の信義昭彰なるに頼り、遠冤を達するを致す。然らずんば、是　涇陵の土と為りしならん。徳を饗け恩を懐ふこと、詞　心を悉くさず」と。毅　撝退辞謝し、俯仰　唯唯たり。

然る後　回りて兄に告げて曰く、「向は辰に霊虚を発し、巳に涇陽に至り、午に彼に戦ひ、未に此に還る。中間　馳せて九

天に至り、以て上帝に告ぐ。帝　其の冤を知りて其の失を宥し、前に遣責せらるる所も、因りて免さるるを獲たり。然而れども剛腸　激発し、辞候するに遑あらず。宮中を驚擾し、復た賓客に忤らふ。愧惕慙懼、失する所を知らず」と。因りて退きて再拝す。君曰く、「殺す所は幾何ぞ」と。曰く、「六十万」と。「稼を傷つくるか」と。曰く、「八百里」と。「無情の郎は安くにか在る」と。曰く、「之を食らへり」と。君　撫然として曰く、「頑童の是の心為るや、誠に忍ぶべからず。然れども汝も亦た太だ草草たり。上帝の顕聖に頼りて、其の至冤を諒せらる。然らずんば、吾　何をか辞せん。此より已去、復た是の如くする勿かれ」と。銭塘　復た再拝す。是の夕、遂に毅を凝光殿に宿す。

〔語注〕

○融融怡怡　「融融」「怡怡」ともに和らぎ楽しむ様。○玲瓏　玉のように鮮やかで美しい様。○簫韶　舜が作ったという音楽の名。『尚書』虞書「益稷謨」に「簫韶九成、鳳皇來儀。」（簫韶　九成すれば、鳳皇　来儀す。）とあり、孔安国伝に「韶、舜樂名。言簫、見細器之備。雄曰鳳、雌曰皇。靈鳥也。儀有容儀、備樂九奏而致鳳皇、則餘鳥獸不待九而率舞。」（韶、舜の楽の名。簫と言ふは、細器の備はれるを見はす。雄を鳳と曰ひ、雌を皇と曰ふ。霊鳥なり。儀　容儀有り、楽を備へて九たび奏して鳳皇を致さば、則ち余の鳥獣　九を待たずして率ね舞ふ。）とある。○綃穀　薄絹。○参差　長短不揃いの様。ここでは丈の異なる薄絹を重ね着していることを言うか。○涇水　第一段落「涇川」注を参照。○錢塘　第四段落「錢塘」注を参照。○頑童　ものの通りの分からない子供。ここでは涇川の竜王のことを罵って言う。○搗退　へりくだって退くこと。○俯仰唯唯　「俯仰」は起居動作。「俛仰」に同じ。「唯唯」は人の意に逆らわず柔順な様。○涇陽　第一段落「涇陽」注を参照。なお涇陽と洞庭湖は約六五〇km以上離れている。○霊虚・凝光殿　他書未見。洞庭君の宮殿の名と思われるが、未詳。○九天　天の最も高いところ。九重の天。『孫子』「形」篇に「善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上。」（善く守る者は九地の下に蔵れ、善く攻むる者は九天の上に動く。）とあり、杜牧注に「九者高深數之極。」（九は高深の数の極なり。）、梅堯臣注に「九地言深不可知、九天言高不可測。」（九地は深きこと知るべからざるを言ひ、九天は高きこと測るべからざるを言ふ。）とある。○剛腸　強くてものに屈しない心。ここではその様に決して晴れない強い憤りの感情。○撫然　「憮然」の誤か。『太平広記』四庫全書本、汪辟疆『唐人小説』（中華書局香港分局　一九八五年）、魯迅『唐宋伝奇集』、塩谷温『晋唐小説』（国訳漢文大成　国民文庫刊行会　一九二〇年）は「憮然」に作る。憮然はがっかりする様。

〔訳文〕

急にめでたい風と雲がわき起こって和らいだ雰囲気となった。そして幡幢の色も鮮やかに、雅やかな音楽がそれに続き、美し

く装った多くの美女がにこやかに笑いさざめいていた。その後ろには天性の美貌、全身に美しい宝玉を飾りつけ、薄絹の衣を重ね着した女性がいた。近づいてみると、何と以前言付けを頼んだ女性であった。しかし喜んでいるとも悲しんでいるともつかぬ様子で、縷縷涙を流していた。

しばらくすると紅の煙が左側を覆い、紫の気が右側に広がった。芳しい気が辺りを巡り、宮殿の中に入っていった。洞庭君は笑顔で柳毅に向かって、「涇水の囚われ人が帰って参りましたぞ。」と言った。そして洞庭君は席を立って宮殿の中に帰った。まもなくまた悲しげな声が聞こえて、それはなかなか止まなかった。

しばらくすると洞庭君は再び出てきて、柳毅と会食した。するとまた紫の裳裾を着け、青玉を手にした人が現れた。容貌は堂々と、心映えも素晴らしい様子で、洞庭君の側に立った。洞庭君は柳毅に「これが錢塘君だ。」と告げた。柳毅は立ち上がり、小走りして拝礼した。錢塘君も礼を尽くして応対し、柳毅に「我が姪は不運にも、若造めに辱められてしまいました。しかし賢明なる君子の明らかなる徳の御陰で、遠き土地での無実の罪を知ることができました。さもなくば、姪は涇陵の土となっていたでありましょう。そなたから受けた恩徳は、言葉に言い表せぬ程です。」と言った。柳毅は滅相もないと退き、言われるままにぺこぺこしていた。

それから振り返って兄たる洞庭君に「先ほどは辰の時（午前八時頃）に霊虚殿を出発し、巳の時（午前十時頃）に涇陽に到着し、午の時（午後十二時頃）にそこで一戦交え、未の時（午後二時頃）に戻って参りました。その間に天界の最上層に参り、上帝陛下に報告いたしました。帝はその咎無き事を御存知で、私の失態をお許し下さった上、以前お咎めになられたこともお許し下さいました。とはいえ、腹の虫が治まらずに、辞去の礼も行わずに慌ただしく、宮殿の中を騒がせて、客人に無礼を働いてしまいました。何ともこの上なく恥ずかしい限りです。」と告げ、後ろに下がって再拝した。洞庭君「どれほど殺したのか。」「八百里ほど。」「薄情者はどこだ。」「食ってやりました。」洞庭君はがっかりして、「若造めがこんな心であったとは、まことに我慢のならぬこと。とはいえそなたも軽率に過ぎる。陛下の御賢察によってこの上なき無実の罪を御理解いただけたのだ。そうでなかったならば、私にどんな弁解ができただろうか。これからは、もう二度と斯様な事はしてはならぬぞ。」と言った。錢塘君は再び再拝した。そしてその晩はそのまま柳毅を凝光殿に泊まらせた。

（六）

〔本文〕

明日、又宴毅於凝碧宮。會友戚、張廣樂、具以醪醴、羅以甘潔。初笳角鼙鼓、旌旗劍戟、舞萬夫於其右。中有一夫前曰、「此

錢塘破陣樂。」旌鋋傑氣、顧驟悍慄。坐客視之、毛髮皆竪。
復有金石絲竹、羅綺珠翠、舞千女於其左。中有一女前進曰、
「此貴主還宮樂。」清音宛轉、如訴如慕。坐客聽之、不覺淚下。
二舞既畢、龍君大悅、錫以紈綺、頒於舞人。然後密席貫坐、
縱酒極娛。酒酣、洞庭君乃擊席而歌曰、
「大天蒼蒼兮、大地茫茫。
人各有志兮、何可思量。
狐神鼠聖兮、薄社依牆。
雷霆一發兮、其孰敢當。
荷眞人兮信義長、令骨肉兮還故鄉。
齊言慙愧兮何時忘。」
洞庭君歌罷、錢塘君再拜而歌曰、
「上天配合兮、生死有途。
此不當婦兮、彼不當夫。
腹心辛苦兮、涇水之隅。
風霜滿鬢兮、雨雪羅襦。
賴明公兮引素書、令骨肉兮家如初。
永言珍重兮無時無。」
錢塘君歌闋、洞庭君俱起奉觴於毅。毅踧踖而受爵。飲訖、復
以二觴奉二君、乃歌曰、
「碧雲悠悠兮、涇水東流。
傷美人兮、雨泣花愁。
尺書遠達兮、以解君憂。
哀冤果雪兮、還處其休。
荷和雅兮感甘羞、山家寂寞兮難久留。
欲將辭去兮悲綢繆。」
歌罷、皆呼萬歳。
洞庭君因出碧玉箱、貯以開水犀。錢塘君復出紅珀盤、貯以照
夜璣。皆起進毅、毅辭謝而受。然後宮中之人、咸以綃綵珠璧、
投於毅側、重疊煥赫。須臾、埋沒前後。毅笑語四顧、愧揖不暇。
洎酒闌歡極、毅辭起、復宿於凝光殿。

〔訓読〕

明日、又た毅を凝碧宮に宴す。友戚を会し、広楽を張り、具ふるに醪醴を以てし、羅ぬるに甘潔を以てす。初め笳角　鼙鼓、旌旗　剣戟あり、万夫を其の右に舞はしむ。中に一夫有りて前みて曰く、「此　錢塘破陣楽なり」と。旌鋋　傑気あり、顧驟悍慄す。坐客　之を視、毛髮　皆竪つ。
復た金石絲竹、羅綺珠翠有り、千女を其の左に舞はしむ。中に一女有りて前進して曰く、「此　貴主還宮楽なり」と。清音宛転として、訴ふるが如く慕ふが如し。坐客　之を聴き、覚えずして涙　下る。
二舞　既に畢はり、竜君　大いに悦び、錫ふに紈綺を以てし、舞人に頒つ。然る後に席を密づけ坐を貫ね、酒を縱にして娯しみを極む。酒　酣にして、洞庭君　乃ち席を撃ちて歌ひて曰く、
「大天　蒼蒼として、大地　茫茫たり。
人　各おの志有り、何ぞ思量すべき。

狐神　鼠聖、社に薄まり牆に依る。
雷霆　一たび発せば、其れ孰か敢へて当らん。
真人の信義を荷くこと長く、骨肉をして故郷に還らしむ。
斉みて慙愧を言ひて何れの時か忘れん」と。
洞庭君　歌　罷み、銭塘君　再拝して歌ひて曰く、
「上天　配合し、生死　途有り。
此　婦に当たらず、彼　夫に当たらず。
腹心　辛苦す、涇水の隅。
風霜　鬢に満ち、雨雪　襦に羅なる。
明公の素書を引くに頼りて、骨肉をして家すること初めの如くせしむ。
永く珍重を言ひて時として無きこと無し」と。
銭塘君　歌ふこと闋はり、洞庭君　倶に起ちて觴を毅に奉る。毅蹶躇して爵を受く。飲み訖はり、復た二觴を以て二君に奉り、乃ち歌ひて曰く、
「碧雲　悠悠として、涇水　東流す。
美人の、雨のごとく泣き　花のごとく愁ふるを傷む。
尺書　遠く達し、以て君が憂ひを解く。
哀冤　果たして雪ぎ、還りて其の休に処る。
和雅を荷きて甘羞に感ずるも、山家　寂寞として久しくは留まり難し。
将に辞し去らんと欲して悲しみ綢繆たり」と。
歌　罷み、皆万歳と呼ぶ。
洞庭君　因りて碧玉の箱を出し、貯ふるに開水の犀を以てす。銭塘君　復た紅珀の盤を出し、貯ふるに照夜の璣を以てす。皆起ちて毅に進め、毅　辞謝して受く。然る後に宮中の人、咸綃綵　珠璧を以て、毅の側に投じ、重畳煥赫たり。須臾にして、前後を埋没す。毅　笑語四顧し、愧揖するに暇あらず。酒闌にして　歓　極まるに洎び、毅　辞して起ち、復た凝光殿に宿る。

〔語注〕
○凝碧宮　洞庭君の宮殿の名と思われるが、未詳。○廣樂　天上界の音楽。『史記』巻四十三「趙世家」に「我之帝所甚樂。與百神游於鈞天、廣樂九奏萬舞。不類三代之樂、其聲動人心。」（我　帝所に之きて甚だ楽しむ。百神と鈞天に游び、広楽九奏万舞あり。三代の楽に類せず、其の声　人の心を動かす。）とある。○笳角　「笳」は葦笛。葦の葉を捲いて作る。「角」は角笛。共に軍楽で用いられる楽器。○鼙鼓　騎兵が馬上で鳴らす小鼓。○旌鏚　内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』（新釈漢文大系　明治書院　一九七八年）は「『鏚』は、字書にない字で、或は「鈚」（やじり）の意か。いずれにしても、武器であろう。」と注し、竹田晃・黒田真美子『枕中記　李娃伝　鶯鶯伝他』（中国古典小説選　明治書院　二〇〇六年）では「『旌』は旗、『鏚』は辞書に見えない。「旌旗剣戟」の「剣戟」に相当する武器と考えられる。」と注す。『太平広記』諸本、並びに汪辟疆『唐人小説』、魯迅『唐宋伝奇集』なども皆「旌鏚」に作るが、塩谷

温『晋唐小説』のみ「旌銚」に作る。銚は長矛。今はとりあえず武器として訳しておく。○顧驟悍慄　用例未見。「顧」は振り返る、「驟」は速い、「悍」は猛々しい、「慄」は恐れる。前掲の内田・乾訳は「ゆっくりとしたり或は早くしたり、たけだけしくしたり、おそれおののくようにしたりすること。舞人の動作の変化を表わす。」と注し、竹田・黒田訳は「まわりを見回したり、早い動きをしたり、舞の動作を表す。」と注す。今諸家に随い、舞の動作と解しておく。○金石絲竹　「金石」は鐘や磬などの金属や石でできた打楽器、「絲」は琴などの弦楽器、「竹」は笛などの管楽器。さまざまな楽器を言う。○眞人　『太平広記』諸本、汪辟疆『唐人小説』は皆「眞人」に作るが、魯迅『唐宋伝奇集』・塩谷温『晋唐小説』は「貞人」に作る。○襦　膝までの短い衣で、暖を取るためのもの。○休　良い、立派な。ここでは洞庭君の娘が居るべき場所、竜宮を言うか。○開水犀　水を開く力を持った犀、「通天犀」のこと。ここではその角を言うのであろう。『抱朴子』巻十七「登渉」篇に「以得眞通天犀角三寸以上、刻以爲魚、而銜之以入水、水常爲人開、方三尺、可得氣息水中。」（真の通天犀の角三寸以上を得るを以て、刻みて以て魚と為し、而して之を銜（ふく）みて以て水に入れば、水　常に人の為に開くこと、方に三尺、水中に気息するを得べし。）とある。『抱朴子』に拠ればこの角には他にも鳥を追い払ったり、夜野外に置いても露が付かなかったり、闇夜でも松明のような光を放つなどの不思議な性質があり、またこの角で作った棒は食べ物や傷口の毒を消す力を持っているという。○照夜璣　「璣」は丸くない珠玉。「隋侯珠」のように夜に光を発する玉か。『搜神記』巻二十「隋侯珠」に「隋侯出行、見大蛇、被傷中斷。疑其靈異、使人以藥封之。蛇乃能走。…歲餘、蛇銜明珠以報之。珠盈徑寸、純白、而夜有光明。如月之照、可以燭室。故謂之隋侯珠、亦曰靈蛇珠、又曰明月珠。」（隋侯　出行し、大蛇を見るに、傷を被り中断せらる。其れ霊異なるかと疑ひ、人をして薬を以て之を封ぜしむ。蛇　乃ち能（よ）く走（に）ぐ。…歲余にして、蛇　明珠を銜み以て之に報ず。珠　径寸に盈ち、純白にして、夜に光明有り。月の照らすが如く、以て室を燭（て）らすべし。故に之を隋侯珠と謂ひ、亦た霊蛇珠と曰ひ、又た明月珠と曰ふ。）とある。

〔訳文〕

翌日、また毅のために凝碧宮で宴を催した。友人や親戚を集め、広楽を演奏し、旨酒を用意し、清潔な御馳走をずらりと並べた。最初に葦笛と角笛、鼓、戦旗、剣や矛を手にした沢山の武夫を右側で舞わせた。中の一人が進み出て、「これは銭塘破陣楽（銭塘君が敵陣を破った曲）と申します。」と言った。戦旗や武器を用いて猛々しい雰囲気があって、辺りを見回したり、調子が速くなったり、猛々しくなったり、恐れおののくようになったりした。座中の客はこれを見ると、髪の毛が逆立つ思いであった。

更に打楽器や弦楽器、管楽器を手にして、薄絹や真珠、翡翠

で飾り立てた沢山の女性を左側で舞わせた。中の一人が進み出て、「これは貴主還宮楽（姫君が宮殿へお帰りになった曲）と申します。」と言った。清らかな音色がゆったりと変化し、まるで何かを訴えかけてくるかのように、まるで慕ってくるかのように響いた。座中の客はこれを聞くと、知らず知らずの内に涙が流れた。

二つの舞が終わると洞庭君は大いに喜び、白絹を下賜して舞人達に分け与えた。それから敷物を近づけて並んで座り、大いに酒を飲んでこの上なく楽しんだ。酒も十分になった頃、洞庭君は敷物を叩いて歌いだした。

「　大空は青々と広がり、大地は茫々と果てしない。
　人にはそれぞれ考えが有るもの、どうして他者が推し量ることができようか。
　狐の神や鼠の聖人の如き小人めが、社（やしろ）に集まり垣根に身を寄せて隠れようとも、
　雷鳴　一たび轟（とどろ）けば、一体誰が刃向かうことができようか。
　心正しき御方の信義を久しく受けた御陰で、我が娘を帰らせることができました。
　まこと恥ずかしき次第ではありますが、御恩は片時も忘れませぬ。」

洞庭君の歌が終わると、今度は銭塘君が再拝して歌い出した。

「　天は人それぞれに運命を案配し、生きるも死ぬも定められた道がある。
　されば我が姪は妻となるべきではなく、奴めは夫となるべきではなかったのであろう。
　我が姪は涇水の片隅で心底苦しむこととなってしまい、鬢は風や霜に曝され放題、雨や雪が上着に吹き付けるという有様。
　あなたが手紙を届けて下さった御陰で、姪を元通り家に帰らせることができました。
　何時何時までも御礼を申し上げぬ訳にはまいりませぬ。」

銭塘君が歌い終わると、洞庭君は一緒に立ち上がって毅に杯を捧げた。毅は恐縮しつつ杯を受けた。飲み終わると、杯二つを洞庭君、銭塘君の二人に捧げ、歌い出した。

「　碧雲はゆったりと、涇水は東に向かって流れ行きます。
　美しき方が雨のように涙を流し、花のような顔（かんばせ）で愁えておられるのを傷みます。
　手紙が遥か彼方から届くことで、王の憂いを解くことができました。
　悲しき恥辱を晴らし、再びその良きところへ戻ることかないました。
　雅な音楽忝（かたじけ）なく御馳走にも感じ入りますが、寂しき茅舎のことを思えば長居はできませぬ。
　いざお別れを申し上げようとすると、悲しみの気持ちがまとわりついて参ります。」

歌が終わると、みな万歳と叫んだ。

洞庭君はそこで碧玉の箱を取り出し、開水の犀（の角）を中に入れた。銭塘君も紅珀の皿を取り出し、照夜の璣を載せた。そして二人とも立ち上がって毅に進呈し、毅は礼を言って受け取った。それから宮中の人々は、みな彩絹や宝玉を毅の側に放り投げた。それらは積み重なって光り輝き、まもなく毅の前後を埋め尽くすほどになった。毅は四方に向かって微笑みかけつつ、礼を言う暇もなかった。宴も盛りを過ぎると、毅は席を立ってまた凝光殿に泊まった。

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎○屋敷　信晴　　○福本　睦美

（○は編集担当者、◎は編集責任者）